

右の「進歩的な学生」のなかに佐藤忠良氏（昭和十四年彫刻科卒）が居た。「美校時代を語るⅡ」（『杜』第五号。平成三年十二月、東京芸術大学美術学部同窓会）によると、氏は五、六人の仲間と或いはジツド、ヴァレリー、アランの著書、高村光太郎の『ロダンの言葉』などを讀んだり、或はロダンの弟子とかブールデルの弟子とかが来ると質問を試みたりし、いろいろな研究会を真面目にやっていたが、極く自然に社会主義や共産主義の国では芸術に対してどういう考え方をもっているのだろうかという疑問に行き当たり、文庫本の『唯物史観的芸術論』（正確な題は不明）を讀んだ。しかし、わからないことがいろいろあったため、代官山の同潤会アパートへ著者を訪ねて質問したりした。ところがその人が共産党員だったらしく、大内兵衛らが逮捕された人民戦線の検挙の際に一緒に検挙され、氏ら本校生のことも明かすみに出て皆拘引された。氏自身は党員でもなければ、そういうものに興味があつたわけでもなかったが、卒業制作にとりかからねばならない十四年一月の十八日に練馬署に連行され、二月十八日まで拘留された。取り調べ中、唯物史観の書物について、「売っているのに読んで、何で悪いんですか？」と聞いたところ、刑事に「ひとりで読むのはいいけど、皆で読むのはいけない」と言われたという。また、思想が悪いからこういう絵が好きなんだと言われてモディリアニの画集まで取り上げられたという。

昭和十三年十一月、大学や専門学校の学生自治運動グループの検挙が開始され、学園から左傾活動が一掃されつつあった。佐藤氏らの左傾活動とも言えないような行動まで阻止され、しかも一カ月も拘留されるような時代が到来したのである。

⑬ 東京美術学校同窓会

昭和十四年三月十日、本校卒業生の組織である東京美術学校同窓会が設立された。「今次事變」下にありて全国各地方に遍在せる卒業者と母校との間に於ける連絡緊密を要望する聲は、日に月に昂まりつゝあるの状態に鑑み」（『発刊の辞』会長芝田徹心『東京美術学校同窓会会報』第一巻第一号。昭和十五年三月）で設立されたのであった。会長は本校校長、事務所は本校内に置かれ、印刷用紙入手困難の折りから、翌十五年に上記の会報が創刊された。僅か十六ページの冊子で、編輯兼発行人は鎌倉芳太郎。内容は上記芝田会長の「発刊の辞」、応召会員氏名（百七名）、戦死者報告（十一名）、戦地通信、会員移動、東京美術学校創立当時回顧録（一）、土橋醇一著「戦乱の巴里を逃れて」、同窓会記事（会則、会費納入者名簿）から構成されている。同窓会の活動は本誌一冊を刊行したことを除いて不明である。

⑭ 教育振作

昭和十二年の日中戦争開始以後、臨戦体制確立の必要から国家総動員法が公布（翌十三年四月）され、また、文部省には教学局（同十二年七月設置）と教育審議会（同年十二月）が置かれ、思想、文化、教育の全面的統制が実施され始めた。これと関連して同十四年五月に本校は教育振作の具体的方策に関する報告書の提出を求められたが、その報告書の控えが現存するので、左に掲載する（一）は文部省の質問条項）。

〔一、其ノ學校ノ教育振作ニ關シ如何ナル點ヲ重視シ居レルヤ並ニ之方趣旨徹底ノ爲講セル具體的措置如何〕

一、教育の振作に關しては常に人格の陶冶を念とし特に國民思想の涵養に留意す

(イ)入學宣誓式は全教官列席の上極めて嚴格なる形式を採り入學者毎に校長に對し別紙宣誓文を朗讀署名の後提出せしめ右終りて校長より生徒の本分國民の義務を強調訓示す

(ロ)校長の入學者引見各科毎に入學者を集め各生徒に就き家庭の事情趣味思想の動向を聴取或は質疑應答して訓育の充實を期す

(ハ)修學旅行は十六日間に亘り毎年各科第三學年生徒を以て組織近畿地方の古美術研究を目的とする頗る眞摯なる旅行團なり從つて日程第一日は伊勢大神宮の参拝に始り大和地方に入りては橿原神宮を奉拝國運の隆昌と旅途の平安を祈願し敬神尊皇思想の涵養に裨補するところ多し 殊に見学の目的物は京都にては御所各離宮奈良にては正倉院其の他各地所在の社寺の建築佛像工芸等の古美術なるを以て研究の傍ら歴史的回顧に依り自ら国体の尊嚴なる所以を認識せしめ國家思想を涵養せしむるに至大の効果あり 或は又旅行中の一夜を室生寺の如き千年の古刹に求め地方有識の士を招きて古美術に關する講話其の他精神講和を傍聴せしめて修養の一端とす

(ニ)現下の時局を認識せしむる必要上學校にて行はるゝ行事には宮城、靖國神社の遙拝出征將士の武運を祈る默禱を先行要件として行事の都度校長配屬將校其の他の教官により時局の重

大性と國民の覚悟を強調力説す 又時々生徒一同と共に靖國神社、明治神宮の参拝を為す

〔二、生徒ノ風尚ヲ高メ風紀ノ振肅ヲ圖ル爲特ニ講セル措置如何〕

二、に關しては各科生徒間に開催せらるゝ各種の會合には生徒主事其の他教官等隨時臨席して校外生徒の模様を聴取し機宜風紀上の問題に就て注意を喚起し、或は思想上の問題に言及し時局下互に戒心すべき様懇話をなし居れり 又校外にて行はるゝ同級会同郷會にも臨席して生徒の風尚の向上に留意す 因に校友會の事業中に茶道部、謡曲部、歌道部、書道部等ありて生徒の風尚振作上寄する所多し

〔三、生徒ノ教授並ニ之ガ指導ニ關シ特ニ留意シテ措置セル事項如何〕

三、生徒一般の教育に關しては生徒所屬の各科教官を中心として行はしめ居れり、從つて生徒は日常該科專屬教授の優秀なる技術と人格に接して自ら芸術は人格の表現なりとの信念を深め人格の完成は美術家たらんとする者の必要條件なることを自覚せしむる様指導す

〔四、教員ノ氣風ヲ振起シテ學校一致ノ實ヲ擧グル爲特ニ講セル方途如何〕

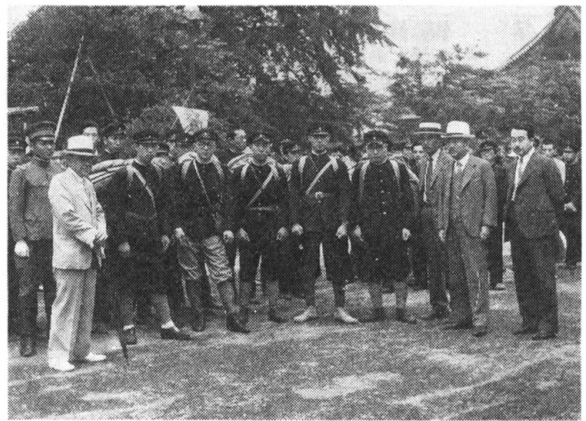
四、に關しては校内恒例の行事たる防火演習及近年実施さるゝ防空演習には全教官職員生徒を動員して各部署に就かしめ學校一致の氣風を振起せしむる上に効果あり、殊に昨年より開始されたる勤勞作業の如きは此の目的を達成するに最も効果ありと思惟するが故今後勤勞作業に一段の工夫を加へ全校職員を一團

としたる學校氣風の作興を期す、此の外職員間の親睦和協を圖る為の厚誼團體を結成し機宜懇親會遠足會等を催して一致協力の氣風を喚起するに努む

(「特殊文書綴摺務」)

⑮ 興亜青年勤勞報國隊

昭和十四年の夏休み中、工芸科鑄金部助教内藤春治と四年生生徒益田卯咲(油画科)、石川正夫(彫刻科塑造部)、大村正夫(同木彫部)、鈴木幸平(工芸科彫金部)、小林道彦(図画師範科)ら五名が興亜青年勤勞奉仕隊に参加して満蒙へ渡った。『東京美術』第十八号(昭和十五年二月)所載の参加者の報告書(内藤、益田、小林、大村執筆)と大村、石井兩氏の談話によれば、このときは各学校から生徒五名ずつが選ばれ、監督者その他が加わり、千余名の隊が編成され、美術學校としては本校の外に京都絵画専門學校が参加。費用は全て國が負担した。出発に先き立って内原に於いて一週間ほど徹しい集合教育が行われ、七月十七日朝、隊は武裝を整えて内原を出発。東京に着いて宮城奉拜、明治神宮參拜などを行い、帝大法文経二号館地階で夕食。ここで本校生たちは佐々木卓、岡四郎、高橋吉雄、北浦大介ら學校職員の激励と土産の甘納豆などを受け取り、各家族、友人らに別れを告げ、次いで黒河独立隊歌を合唱しつつ上野駅に向けて行進し、再び校友、先輩らに見送られて列車に乗り込んだ。翌朝、大隊は新潟に到着。軍用船松葉丸に乗り込んで、市長の壮行の辞、小学生たちの愛國行進曲、中学生たちの喇叭鼓隊、女學生たちの「海行かば」の合唱等々に送られて出発し、二十一日羅津



興亜青年勤勞報國隊出発式 昭和14年7月

(石川正夫氏提供)

前列左より配屬將校、芝田徹心、小林、石川、大村、益田、2人おいて佐々木卓

に上陸。滿洲建設勤勞奉仕隊の手帖とパンフレットを配布された。隊は目的地によって幾つかに分かれ、本校生たちの所属する黒河部隊は同日夜に列車で瑗瑗に向かった。二十四日夕方瑗瑗に着いた。平常に分乗して北にソ連領を眺めながら宿舎の某部隊に着いた。平常の勤勞作業は排水壕を掘ることであったが、出発前の集合教育と比べれば作業は楽なもので、しかも、美術學生は國境地帯の実情調査と慰問ということが派遣の条件であったから、絵を描いたり、白樺の木で彫刻したりして、それらを陸軍病院に贈った。時おりは外出して風物を楽しんだようで、内藤春治は黒河見学のときのことを前掲誌に次のように記している。